

丹羽文雄の『少国民版 ソロモン海戦』論

——原作との比較検討を中心に——

服部裕子

要旨

本稿で取り上げる丹羽文雄の『少国民版 ソロモン海戦』は、丹羽の従軍体験を表した小説『海戦』の児童版である。本稿では、まず当時の状況を踏まえ、原作となる小説『海戦』の作品世界を分析したところ、たしかに、この作品は日本海軍の華々しい功績を記したものに違いないが、言論統制下でありながら、可能な限り自己に忠実に戦争の実相、戦争のもたらす悲劇を表した、特筆すべき作品として評価できることが明らかになった。

次に、『少国民版 ソロモン海戦』と原作『海戦』とを比較すると、子ども読者に配慮して、わかりやすい表現に、興味を持ちやすい内容に書き換えられたが、死のイメージが大幅に緩和され、日本海軍の完全勝利の物語となっていることが明らかになった。原作が十分に生かされなかった面もあるが、子ども読者に軍人精神を植え付けるような作品にはならなかった。この点で、この作品の存在意義は大きい。『少国民版 ソロモン海戦』は、原作『海戦』と同様に、戦時下の注目すべき作品の一つに数えられるのではないか。

キーワード：丹羽文雄，小説『海戦』，『少国民版 ソロモン海戦』，戦時下，従軍体験，戦争文学

はじめに

日中戦争が泥沼化していく中で、日本でも戦意高揚のために「ペン部隊」が組織され、新聞・雑誌等の記者やカメラマンの報道だけでなく、多くの作家が戦地を訪問し作品を発表するようになった。当時の子ども向けの雑誌や単行本の中にも、このような従軍作家の作品を見つけることができる。本稿で取り上げる『少国民版 ソロモン海戦』は、丹羽文雄の従軍体験を表した『海戦』の少国民版（児童版）である。原作『海戦』に関する先行文献として、同時代評以外にも、

田中勲儀「丹羽文雄の南方徴用」(『昭和文学研究』35 1997.7), 保阪正康『作家たちの戦争』(毎日新聞社 2011.7) などがある。一方, 少国民版に関しては, すでに根本正義が『少国民版ソロモン海戦』論(『現代文学史研究』12 2009.6)で原作と比較しているが, 主要な場面を併記した程度であり, 作品の特徴に言及し相違点を明確にしたとは言いがたい。そこで, 本稿では, まず当時の状況を踏まえ原作の作品世界を分析し特徴を明らかにした上で, 『少国民版ソロモン海戦』について論じたい。子ども読者を意識して書き換えられたことによって, 作品世界にどのような違いが見られるのか, 原作と少国民版とを比較し具体的に提示したい。さらに, 丹羽文雄の他の子ども向け作品に関しても述べる。

第1節 丹羽文雄とソロモン海戦

【丹羽文雄の従軍体験とその反響】

丹羽文雄は, 1938年9月に中国戦線の武漢作戦に従軍し, 『還らぬ中隊』(中央公論社 1939.3)を発売しているが, 太平洋戦争が勃発し国民徴用令(1939.7)が発布されると, 今度は「海軍報道班員」の一員としてラバウル行きを命ぜられる。丹羽が呉を出発してラバウルに向かった時期, ミッドウェー海戦(1942.6)で敗北した日本軍は, ソロモン諸島のガダルカナル島に飛行場を建設する計画を進めているところであった。しかし1942年8月7日, それを阻止しようとする連合国軍の奇襲上陸作戦によって現地守備隊は玉砕。救援要請を受けて第8艦隊が急遽出撃することになる。第8艦隊は, 8月8日から9日にかけての深夜, 連合国軍の泊地ツラギ付近の海峡に突入し敵艦隊を攻撃する, 殴り込み作戦を決行したのである。この海戦における戦果は著しく, 戦力では劣勢の日本軍の完全勝利に終わっている。このツラギ海峡夜襲戦, これを第一次ソロモン海戦(連合国軍側の呼称はBattle of Savo Island)と呼んでいる。この戦いの旗艦は丹羽が偶然にも呉からラバウルまで乗船した重巡洋艦「鳥海」であった。丹羽は, 「鳥海」に海軍報道班員の一人として乗船を命ぜられ戦場に臨んだのである。戦地ラバウルに丹羽が到着してから, わずか1週間余後のできごとであった。交戦中, 甲板でノートをとっていた丹羽は被弾し, 腕に全治3ヶ月の重傷を負う。そのため 早々に帰還命令が下り, 帰国後, 一気に従軍体験を『海戦』と『報道班員の手記』(改造社 1943.4)等を書き表したのである。¹

第一次ソロモン海戦に関するニュースは, 8月10日の新聞各紙に1面トップ記事で大きく掲載されている。その後数日間, 紙面には勝利したソロモン海戦関連の記事が取り上げられ, 9月1日に丹羽の従軍記が掲載された。²「朝日新聞」, 「大阪毎日新聞」, 「満州新聞」(9月2日)を見ると, 丹羽の従軍記は紙面の半分を占める大きさで掲載されており, 文章はほぼ同じである。それぞれの紙面の見出し「眼前悶絶する火の敵艦」(朝日), 「宛ら熔鋸爐, 沈む敵艦」(大阪毎日), 「のたうつ火焰の敵艦」(満州)には, 丹羽の文章を元に戦果が端的に表されている。

この丹羽の新聞に掲載された従軍記に関して, 早くも伊藤整が「文藝」1942年10月号の「文芸時評」で取り上げている。伊藤は「近来見た多くの報道文の中で, もつともよく私たちに戦争

の実体を、自分の眼で見たやうに描き出したものであつた」と評しており、³丹羽の従軍記は小説「海戦」が発表される前から、すでに注目を集めていたことがわかる。

雑誌「中央公論」1942年11月号には「海戦」が掲載され、翌月の12月に単行本が上梓される。丹羽以外にもソロモン海戦に関する著作は、新聞記者泉毅一の『ソロモン戦記』（朝日新聞社 1943.5）、海軍報道班員の現地報告、大本営海軍報道部編『ソロモン海戦』（文芸春秋社 1943.6）などが刊行されているが、丹羽の『海戦』は当時ベストセラーとなり、発行部数が中央公論社だけでも5万5千部に上ったという。⁴さらに、満洲には発行部数の1割程度しか渡らなかったことから、⁵翌年1943年10月、満洲向けに、新京にあった国民画報社より『ソロモン海戦』という表題で、小説「海戦」のほかに短編を加えた全9編が初版5千部で新たに出版されている。丹羽の従軍体験に関連した著作は、後述する「婦人公論」「文藝」10月号の掲載作などを含め、佐々木充によれば、1943年にまで余波が及び、20誌ぐらいになったのではないかという。⁶

【児童雑誌・新聞に見られるソロモン海戦】

第一次ソロモン海戦に関するニュースは、もちろん子ども向けの新聞・雑誌でも報じられている。「少国民新聞」（大毎版）では、一般紙より一日遅れて8月11日の1面、朝日新聞社の「週刊少国民」では8月16日号のトップ記事「輝くソロモン海戦」、8月30日号では夜襲戦の写真、児童雑誌では、「少年倶楽部」「幼年倶楽部」「良い子の友」「海洋少年」10月号、「航空少年」12月号などに、ソロモン海戦の戦果が報告されている。日本が圧勝した第一次ソロモン海戦は、北原白秋が「ソロモン夜襲戦軍歌」と題して挿絵付きで大々的に、「週刊少国民」（1942.10.25）に発表するほど、その当時脚光を浴びた大勝利の海戦であった。

丹羽の従軍記についても、子ども向けの新聞・雑誌で取り上げられている。海軍報道班員丹羽文雄の名で、「週刊少国民」の9月6日号、「少年倶楽部」と「海洋少年」の10月号に掲載されている。「海洋少年」には、大人向けの従軍記が一部省略されて掲載されただけであるが、「週刊少国民」の「壮絶！ツラギ海峡夜襲」と「少年倶楽部」の「ソロモン海戦従軍記『世界に比なき日本海軍の夜襲を見る』」は、子ども向けに書き換えられたものである。内容については第3節で紹介する。

単行本では、本稿で取り上げる『少国民版 ソロモン海戦』が、1943年4月に室戸書房より1万5千部刊行されている。以上述べてきたように、当時注目を集めた丹羽の従軍体験は、こうして子どもにも伝えられたのである。

第2節 小説『海戦』の作品世界と時代の制約

【作品の特徴1 作品に見られる死の意識】

『海戦』は、主人公の「私」が任地ラバウルに到着した1週間後から、旗艦「鳥海」に乗船して海戦に臨み、戦果が発表される帰路までを描いた中編小説である。時刻の明示とともに第一次

ソロモン海戦前後の様子を描きながら、「私」の内面を追う私小説の形式で表されている。第5章にあたる「決戦」には、前述の新聞掲載の従軍記の生々しい描写が活かされている。この作品の主な特徴として、次の3点が挙げられる

まず第1に、作品の冒頭近くから結末に至るまで、文中には何度も「死」「覚悟」という語が見られ、「私」の死に対する意識が全編にわたって描かれていることである。軍艦に乗り込むときから、報道班員としての役目を果たそうと、死に対する覚悟はしているが、戦場に向かう途中も、26歳の飛行長の「死んでるかも知れません」(p.32)と無造作に言う言葉に驚き、決戦前日の夜中には、魚雷攻撃を想定し死の恐怖に怯えたりする。そして交戦中、「私」は死に直面する。次の引用は、「私」の2間ほど離れたところで敵の砲弾が炸裂する場面である。

——死？

自分をふりかへつたが、その感じではなかつた。自分はまだ死には届かない気がした。右上腕部に砲弾の破片がとびこんだのは触らなくとも判つた。(中略)

「これだけのことか。これだけの傷ですんだのか」

或は死んだかも知れないと思ふと、ぎよつとなつた。(pp.213-214)

体当たりしてくる敵艦の「死をもたらす唸り声」が聞こえる中でも、「私」は作家として「死を待ちうけてゐる瞬間の意識と、眼に映るものをしつかり見ておかうとする努力」(p.212)を惜しまない。前述した新聞掲載の従軍記では、右腕に被弾し全身に爆傷を受けた直後、「畜生、やったな!」「憎い敵は沈められたのだ」というように、作中に敵愾心が表されているが、この小説『海戦』では、作者丹羽を即死させたかもしれない敵艦についても、「別世界の出来事のやうに、敵艦はゆつくりと姿を没していつた」(p.214)と冷徹に描いている。ここには後述する観察者・傍観者の立場を貫こうとした作家姿勢がうかがえる。

「私」は即死を免れたが、近くにいた兵が犠牲となる。足下に倒れている白い姿を見て「一戦死?」と、一人で死を実感し、さらに2歳の子を持つ顔なじみの分隊長が犠牲となったのを目撃する。戦線を離れた翌朝、「私」は再び「目のまへで静かに倒れた白い姿」(p.271)を思い出す。結末は、「私」が戦死者を弔い、「海ゆかば」⁷の合唱を想起する姿で終わっている。このように、作中には死に対する恐怖と戦争がもたらした死が明確に描かれている。

【作品の特徴2 素人の「私」と軍人の対比】

第2に、主人公の「私」が「素人」「娑婆の人間」の一人として軍人と対置して描かれていることである。「内地と戦線をつなぐ唯一の、なまなましい働きのできる方法」(p.290)として、作者は素人の感覚や思考を重視しており、軍艦内の生活、軍人精神、海戦の様子が、「素人」「娑婆の人間」である「私」の目を通して描かれている。

作品の冒頭から、「戦線ずれ」していない「私」が記されている。他の報道班員たちがツラギに敵が上陸したニュースで騒然しているとき、「私」は一人だけ洗濯をしているのである。乗船してからも、軍艦という運命共同体に属しながら、「私」は「よくよくの異端者だといふひけめ

を覚える」(p.40)。「死ぬのがあたりまへ」(p.50)という水雷長のいさぎよい言葉から、不安や絶望や恐怖に対する心構えの違いを痛感し、「素人の私 [が]、軍人同様のたかい自己放棄のできてゐないのは当然で」(括弧内筆者以下同様)羨しいと思う。(pp.64-65)飛行長、機関長、砲術長、航海長など士官たちは、決戦の前でも、食欲が旺盛で、ビールを飲んだり、碁を打ったりして、終始落ち着いた態度で、通常とは変わらない生活を送っている。こうした「艦内生活者とあくまで無縁」(p.170)である「私」は、闇夜に慣れるまで何一つ見つけることはできず、戦闘中も風圧を受けて「二三百回もよろめき通しで」轟音の連続で体が麻痺したようになる。まさに「身も心もくたくた」の状態に陥ってしまう。

一方、兵たちは、「驚天動地の激闘」(p.206)の最中でも、訓練通りに「正確に、冷静に、果敢に」任務を果たしており、「私」はその「敢闘精神」に敬服する。だが、「旗艦に必要なものは緊張とその持続だけ」であり、たとえ襲いかかる敵艦を撃沈しても、「人間らしいよろこび」(興奮のどよめき)、「その隙間に人間らしい人間の、多分に娑婆の匂ひのする表現はさしはさむことを許さな [い]」(pp.215-216)という現実を知り、「私」は再び孤独になる。新聞掲載の従軍記では、この部分が「艦内から興奮のどよめきがおこつた、しかし…すぐに忘れて」と記されている。小説『海戦』では、人間らしさを必要としない軍人像をより明確に表そうとしている。

戦いの後の士官室でも、「兵や士官の精神がいかに娑婆の人間とちがつてゐるか、ことごとく思ひ知らされ」、(彼らの偉大と精神の強靱さ)に圧倒される。(p.263)そして追い詰められた「私」は、子どもの写真を取り出し心の拠り所とするのである。

このように、全編を通して「私」を卑下して描くことによって、「素人」の「私」と軍人との「截然とした相違」(p.136)を明確にし、軍人精神の偉大さ、日本海軍の強さを際立たせる手法をとっている。

しかし文中の「娑婆の人間はよくよく娑婆以外には生きられない」(p.216)「娑婆の人間としてのぬくもりと匂ひのうせてゐない私に、軍人同様の心境になれといふ方が無理であらう」(p.263)という言葉の裏には、敬意を表しながらも、作者自身は軍人精神を受け入れることができないという意味が含まれているのである。

【作品の特徴3 冷徹な傍観者・観察者の視点】

第3に、終始一貫、戦場においても、傍観者・観察者の視点で冷静に淡々と描いていることである。夜戦の光景に、「空を彩る青い火赤い火、白い火のみごとさに戦争とは切りはなした美しさを感じた。」(p.188)「両国の花火大会をもつと大仕掛にしたやうだと眺めた。」(pp.191-192)それは「夢の世界」「童話の世界に近い」とも言えると表現している。さらに、「敵艦の長さの二倍もある水柱が、艦と同じ色になつて見えた」(p.182)「艦首と艦尾が思ひがけない水面からもち上り、めいめい勝手な意志をつき合はせるやうに海面をはなれてしまつた」(p.196)「斉射の幅で艦隊の一行縦隊の長さが判つた」(p.204)「(旗艦の主砲の)轟音のため皮膚の感覚が一つ一つ死んでいくのを感じた」(p.188)など、それらの的確な描写は臨場感にあふれ、巧みとい

うより他にない。

こうして、作者丹羽は、自分の目で見たまま感じたままを書き表したわけであるが、その中には、戦争の悲惨さを表したのも含まれている。それは、「自爆するまで海上をのたうちまはる」敵の甲巡の描写において見られる。作中では、燃える敵の甲巡を「鎔鉞爐からひき出す鉄塊の色」「海上に艦首の形をした白熱の鉄塊を引き出したやう」「白味をおびた赤い油絵具をどろりと海上に落したやう」(pp.184-186)であると喩え、それでも敵は「まつ赤に焼けただれた甲板から」白い鋭い光りを射ってくる。「しかしすでにこの世のものではなかつた」(p.186)と述べている。

文面からは、敵艦内が生き地獄と化していることが容易に想像でき、敵艦とはいえ最期の痛ましい姿が如実に写し出されている。ここには、「生涯思ひ出すたびに、心臓の一部に針をたてられるやうな痛みを覚えるだらう鮮烈な印象であつた」(p.186)という率直な感想まで付け加えられている。

戦闘とはまさに命の奪い合いである。前述したように、「私」自身も被弾し九死に一生を得るが、その直前に「火焰を背負つた敵艦は全身で唵鳴りながら、喚きこむやうに接近」する。(p.210)「私」はその体当たりしてくる敵艦から激しい気魄や人間の執念を感知する。作中には他の場面でも、「生命を素手でぐにやりと抑へられたやうな気味悪さであつた。」(p.179)「その線の一つ一つがおそろしい意志を孕んでゐた」(p.194)など、人間の殺意を表す比喩表現が見られ、戦争の本質をとらえている。

【言論統制下の執筆制約】

この作品『海戦』は、言うまでもなく戦時中の言論統制下で書かれている。火野葦平によれば、「戦争の暗黒面を書いてはならない」「軍人の人間としての表現を許さない。……小隊長以上は、全部、人格高潔、沈着勇敢に書かねばならない」などの執筆制約があったという。⁸

当時丹羽は、海軍報道班員として徴用される前に、「西門家の人々」「新しい声」で執筆禁止、「中年」で発禁処分を受け、⁹「情痴作家」として情報局に監視されている状況にあった。従軍からの帰国後、丹羽は「海戦と人間」というテーマで小説を書こうとしていたらしいが、¹⁰丹羽にとって『海戦』をいかに書くかということは、「自己の文学の真実性をも抛(放)棄し得ない……非常に困難な仕事」であったように思われる。¹¹

丹羽は、戦後に発表した『告白』(六興出版部 1949.3)の中で、武漢作戦に従軍して小説『還らぬ中隊』を書いた頃には、「まだ作家に戦争を批判する余地が許されてゐた。作中の主人公に、軍人や戦争を批判させ」ることができたが、¹²あの筆法を『海戦』に使ったらたちまち発禁処分となったかもしれないと、主人公紋多に当時の検閲状況を語らせている。¹³事実、『海戦』と同時期に発表された『報道班員の手記』は、軍規弛緩という理由で発禁処分になっている。丹羽は作家として妥協せず、自分とともにラバウルにいた海軍報道班員の実態を正直に書いてしまったからである。

『海戦』では、前述したとおり、「私」の内面を描くだけで、士官たちの内面には触れていない。私小説の形式をかりたのは、丹羽にとって、この『海戦』が最初だったという。¹⁴丹羽が人間らしい感情をもった兵士を描こうにも、それを許さない状況だからではなかったか。時代の制約の中で、丹羽は、撃沈される「悲しき身振り」の敵艦、艦内の負傷者や戦死者を少なからず描き、戦争の悲劇を伝えている。この小説『海戦』は、帝国海軍の強さ、帝国軍人の偉大さを物語る報道班員としての使命を果たしつつも、「軍部の狙いと異なる報道班員の目」¹⁵で、可能な限り自己に忠実に戦争の実相を描いたと言えるだろう。

第3節 『少国民版 ソロモン海戦』とその他の子ども向け作品

【執筆協力者の牧屋善三】

前述したように、『少国民版 ソロモン海戦』（以下少国民版）は、丹羽の小説『海戦』の児童版である。装幀・挿絵は、同じく海軍報道班員の松添健である。作中には、原作とは異なり、軍艦・艦内生活・地図など16の挿絵が載せられ、子ども読者の興味を惹きつけている。

「はしがき」を見ると、「幸ひ友人牧屋善三君の協力を得て、今回の従軍手記がここに立派な装ひをこらし、……世に出る運びとなりました」と記されているが、牧屋が実際に、どのような経緯でどの程度執筆に関わったのかについては不明である。牧屋善三は子どもの本専門の作家ではない。彼の子ども向けの著作に関して、調べた限りでは、戦後に発行された単行本、『水の化学』（電子社1947.12）、¹⁶『ノーベル賞の父 アルフレッド・ノーベル』（電子社1950.1）など、数冊あるにすぎない。

たしかに丹羽と牧屋善三は旧知の間柄にあったようで、丹羽は牧屋の著作『秋の夫婦』（昭森社1941.5）では「跋」、『限りなき出発』（明石書房1941.10）では、作者牧屋の紹介をしている。牧屋の方も「丹羽文雄・人と作品」を「文藝主潮」に6回連載している。その第1回に小説『海戦』を取り上げている。その作品論の中で牧屋は、丹羽が基地から東京へ帰って間もない頃、自分が見舞いに行くと、元気な丹羽からソロモン海戦の様をいろいろと聞かされたことを明かしている。¹⁷少国民版の「はしがき」によれば、従軍後4ヶ月経った1942年11月には脱稿しているので、もしかしたら、この見舞いが牧屋と少国民版を結びつけたのかもしれない。

【原作との相違1 読解力に応じた配慮】

それでは、原作『海戦』と少国民版とを比較していきたい。少国民版では、子ども読者を意識して、まず第1に、子どもに理解しやすいように書き換えられている。文体は「である調」から、子どもにとって親しみやすい「です・ます調」に変更された。表現は、難解漢字がひらがな表記に、難解語句や表現が意味を汲み取って平易なものに置き換えられている。中には補足説明を加えてわかりやすくしたものも見られる。表1に例を挙げておく。

表1 書き換えの例

少 国 民 版	原 作
「敵に見つかったかと」 p.66	「敵の触手になでられた」 p.91
「たいくつしました」 p.114	「しよざいなくなつた」 p.156
「敵の呪ひ」 p.176	「人間の執念」 p.210
「綺麗好きなので防暑服を始終洗はないと気がすまないのでせう。そのためか少し短くなつたやうにみえます」 p.14	「短くなつたやうな防暑服に、潔癖をあらはしてゐた」 p.28
「当れば艦を粉碎し、人間の生命を駄目にする、恐しい意志と力をもつてゐるのです」 p.156	「おそろしい意志を孕んでゐた」 p.194

内容については、原作を基本としつつも、後述する2つの短編が新たに挿入され、「決戦」(5章)を中心に編集されている。表2が示すように、原作が296頁7章構成であるのに対し、少国民版では228頁、各章を短くし全体が19章で構成されている。全体の4割近くを占める「決戦」部分は8つの章に細分化され、見出しからも内容が推測できるように工夫されている。

たしかに少国民版では原作と同様に、私小説の形式をとっているが、「決戦」以外の部分を見ると、主人公「私」の内面描写、情景描写の大部分が省略され、全体に簡略化されている。主要

表2 少国民版と原作の章立て対照表

少 国 民 版	原 作
1. 基地の朝	「出動」〈1〉
2. 軍艦の人々 (一)	〃
3. 軍艦の人々 (二)	「前夜」〈2〉の冒頭 + * 「海ゆかば一艦内生活の断片」を挿入 ¹⁸
4. 飛行長と私	「出動」〈1〉(飛行長の部分) + 「前夜」〈2〉 + 「八月八日」〈3〉の冒頭
5. 機関長のこと	* 「艦上日記—機関長のこと」を挿入 ¹⁹
6. 敵機現はる	「八月八日」〈3〉
7. 海峡暮色	〃
8. 最後の偵察	「夜襲までの時間」〈4〉
9. 敵前入浴	〃
10. 全軍突撃せよ	「決戦」〈5〉
11. 敵艦隊見ゆ	〃
12. 初弾命中	〃
13. 飛び交ふ弾道	〃
14. 燃え尽す敵艦隊	〃
15. あつツ、危機一瞬	〃
16. 甲板の上と下	〃
17. 戦闘三十六分間	〃
18. 戦ひすんで	「戦ひの後」〈6〉
19. 無敵帝国艦隊	「表裏」〈7〉

原作の〈 〉は、形式的な章番号を表す。

な登場人物も、「私」と「飛行長」、「機関長」、「水雷長」「主計長」等の軍人に絞られ、同僚の報道班員は名前ではなく「ニュース・カメラマン」「仲間」という表記で、作中にほとんど姿を見せなくなった。

また少国民版では、わかりにくい箇所には補足的な説明が付け加えられている。とくに敵哨戒艦が日本艦隊を見送って通過した場面では、緊迫した状況を読者に伝えるために、1頁半にわたって解釈が以下のように説明されている。

いつたいこれはどういふわけか。……敵の態度は、どうにものみこめない。怯気づいたのか。……やはり敵は怯気づいて逃げたものと見てゐました。理屈ぬきの気魄です。……私の素人くさい心配などにはおかまひなしに、艦隊は確信をもつて堂々と敵のゐる水道にとびこんで行く。(pp.129-130)

さらに、軍人の偉大さ、日本軍の強さを強調、誇張して表す文が、以下のように、若干見られるようになった。

飛行長は今から腕が鳴って仕方がないといふ顔である。(p.50)

訓練で夜目がきくのです。夜目に強いのは日本軍隊の特徴だといふ。(p.91)

外国人には真似られない日本海軍独特の訓練を経てゐる兵たちに比べたら、ぼつと出の私など、足もとにも及ばないのです。(p.134)

【原作との相違 2 子どもの興味・関心に応じた配慮】

第2に、子どもが興味を持ちやすいように、内容が差し替えられたことが挙げられる。少国民版には、表2に挙げたように、他の雑誌に掲載された短編「海ゆかば一艦内生活の断片」「艦上日記—機関長のこと」が挿入され、日常生活とは異なる軍艦内の生活が、素人の「私」の失敗談を交えながら紹介されている。第2章「軍艦の人々」には、腕時計を修理してもらった代償が「ありがとう」の一言では気が済まないという原作にあるエピソードのほかに、艦内は廊下や便所に至るまですべて鋼鉄製なので、鉄製の敷居や階段にぶつかれば簡単に怪我をし、鉄に圧倒されて疲れるという話や、船倉の釣床(ハンモック)で寝ようとしても、頭上のパイプや電線の束、船の揺れで、眠ることが困難な話などが追加されている。第5章には、45度の熱気に包まれ、魚雷が飛び込んだら危険な機関室で働く人々と、機関長の地味であるが重要な仕事を紹介されている。

報道班員は士官待遇であり、兵隊のような苦しい任務があるわけではない。士官室で食事をす、碁を打つ、入浴するなど、戦闘中以外は艦内で自由に過ごすことが許される気楽な立場である。作中には原作と同様に、非日常的な艦内の様子、戦闘の様子などが、観察者の視点で的確に詳細に表されている。素人の「私」の新鮮な驚きと素朴な感想は、まさに子ども読者にとっても、興味あふれる魅力的な内容であるだろう。

【原作との相違3 死のイメージの緩和】

第3に、「私」の内面描写を大幅に削った結果、「死」のイメージがかなり緩和されたことが挙げられる。「私」が死に直面する場面では、当然のことながら少国民版にも「ただ死ぬのだ、死ぬのだ、死ぬまでは」「一死ぬのかな」「死ぬにしては」「あの瞬間死んだかも」(pp.178-180)などの語が並び、分隊長の戦死の場面も原作と同様に描かれている。しかし、原作の冒頭近くの乗船時に死を意識する場面、夜中に死に対する恐怖で眠れない「私」の内面描写(7ページ分)、戦闘後に再び「倒れた白い姿」を思い出す場面、最終章「表裏」の戦死者の遺品の整理を目撃し、安置された戦死者に合掌する場面などは、少国民版ではすべて削除されている。文中から「死」「覚悟」という語がほとんど抹消されているのである。死に対する恐怖は観念的で、子どもにはわかりにくいかもしれないが、この点で、執拗なまでに死を意識させた原作とは大きく異なっている。

飛行長の「自分が死にいく決意」(p.39)、や機関室の人々の「決死の覚悟」(p.52)「初めから自分といふものを放棄した、すきとほるやうな心境」(p.55)など、いわゆる自己放棄の軍人精神は、少国民版にもある程度残されているが、原作の水雷長の言葉「死ぬのがあたりまへ」(p.50)や「死以外の運命をもたない飛行士」(p.82)等は文中に記されず、少国民版では軍人が「死」に近い存在であることはあまり表されていない。

このように、書き換えられた少国民版では、物語が短くなり会話と行動で展開されるので、たしかに原作に比べてテンポがよく読みやすくなった。物語は、ツラギ海峡に行く道中も、敵機に発見されたので空襲されないか、敵艦がそのまま通過したので袋の鼠にする策略ではないかなど、緊張する場面が連続する。戦闘場面でも、魚雷が命中する、水柱が上がるなど、原作と同様に臨場感あふれる巧妙な描写で、子ども読者を飽きさせない。「日本海軍の強さ偉大さを諸君に知っていただくかう」(はしがき)という報道班員の「日本人として」の使命は果たしているが、丹羽が本来描きたかったのは、これだけではなかったはずである。原作『海戦』では、書斎から出てきたばかりの人間(素人の「私」)が戦場を体験するとは、どのようなことなのか、それが「私」の内面描写とともに表されている。そして、最終章「表裏」では、たとえ圧勝でも、犠牲者が出るという戦争の悲劇的な一面にも触れている。それにもかかわらず少国民版では、これらの重要な部分が削除され、物語は日本軍の大勝利を伝える大本營の発表で終わっている。いわゆる「幸福な結末」を迎える作品に仕上がっているのである。向日性を好む児童読み物の限界を感じさせるような結末である。

なお、加筆された箇所には、たとえば、「自分の眼がいちばんぼんくらである」(p.134)、「むしろびくびくもので逃支度にとりかかつて」(p.203)など、丹羽による加筆なのか疑問が残るような表現も見られたことを付加しておく。

第4節 児童雑誌掲載の従軍記、他の子ども向け作品

【「少年倶楽部」に掲載された従軍記】

『少国民版 ソロモン海戦』刊行以前に、児童雑誌に掲載された丹羽の従軍記、「週刊少国民」の「壮絶！ツラギ海峡夜襲」と「少年倶楽部」の「ソロモン海戦従軍記『世界に比なき日本海軍の夜襲を見る』」は、前述したように、どちらも一般紙の従軍記が子ども向けに書き換えられたものである。「週刊少国民」の掲載作には、それほど大きな相違は見られないが、「少年倶楽部」の掲載作は、丹羽自身が書いたものなのかどうか疑問が残るほど、大きく様変わりしている。「少年倶楽部」1942年10月号を見ると、目次も目立つように色を変えてあり、9ページにわたる本文には、丹羽の顔写真、梶島勝一の挿絵見開き2箇所、南太平洋の地図が挿入され、比較的大きな扱いで取り上げられている。内容は、傍観者の立場で書かれていたはずの一般向けの従軍記とは大きく異なり、米英艦隊に関する劣悪なイメージが、「意気地なさを笑ひました」「ほんやり千万な話」「おごりたかぶつた」「みじめに叩き伏せられて、泣きべそをかいてゐる」などと誇張されて付加されている。さらに文中には、「自分が日本人であること、そして、この自分が戦死をとげることに、かぎりない誇りと喜びを感じて」²⁰ いるという模範とすべき日本人意識まで書き加えられ、「御稜威のもと、このやうな強い強い海軍に守られてゐる私たちは、なんといふ仕合せでせう。」²¹ で終わっている。こうした傍観者の立場ではない書き換えは、前述した少国民版には見られない。丹羽の従軍記は、有力誌「少年倶楽部」の中で、大日本雄弁会講談社編集部 of 強い意向によって、原形を留めないほど、大きく変容してしまったと言える。

【少女向け読物】

そのほかの丹羽の子ども向けの作品について触れると、調査した限り、単行本は見あたらず、『丹羽文雄文学全集』第28巻（講談社 1976.8）掲載年表の3作と他1作しか発見できなかった。そのうちの2作「若鷺魂」（「週刊少国民」1944.5.21）と「艦内の陸戦隊の人々」（「少女の友」1944.1）は、従軍体験に関連した回想である。「若鷺魂」では度胸のある少年航空兵を、「艦内の陸戦隊の人々」では、ラバウルに向かう際に同船した陸戦隊を題材にしている。

残りの2作は少女向け読物である。その一つ「夕陽ヶ乙女」は、「少女の友」（1943.1～6）に掲載された。初回1月号の目次には「新連載長編小説」と冠が付されており、連載開始当初は長編小説の企画だったように思われる。物語は、東京の美術学校を卒業して5年になる主人公の大場太市が、故郷北海道で牧場経営をしている兄夫婦の元に帰るところから始まる。太市は、そこで兄夫婦に養育された18歳になるお通と再会する。お通は亡父の研究所助手、科学者濱小三郎の遺児であり、太市とお通は兄妹のような親しい間柄であった。やがて太市は山奥の分教場の代用教員となり、お通は研究所の元研究員水上備介の計らいで東京へ行くことになるのである。物語は、ともに歌人である太市の兄嫁せい子と同僚教師の牧屋美津留を登場させながら、太市とお

通との関係を軸に、若い牧童の省吉、水上備介の息子慶介などが絡んで発展していくように思われるが、途中で終わってしまう。

この作品の掲載時期が1943年であるにもかかわらず、時局の反映は、出征する東京の友人根本と、元許婚が戦死したという同僚の牧屋の設定に見られる程度である。まさに時局に合わない作品であると言えるだろう。このように「夕陽ヶ乙女」は、恋愛作家と賞された丹羽が本領を發揮するような長編少女小説を予想させる内容であったが、残念ながら連載途中で打ち切りになったようである。²²

「黒猫」は、終戦の1年後に「少女クラブ」(1946.9)に掲載された。山村に一時的に滞在し東京へ戻る桂子一家と、その家に住み着いた黒猫との生活を描いた平凡な短編である。近くの前山、鮎釣り、山かがし(蛇)など、都会から疎開した子どもを意識した内容である。この作品が掲載された時期は、GHQによるページ問題で、丹羽が仮追放処分を受けた頃であり、全集の年表を見ると、1946年6月から9月あたりは、雑誌に発表された作品があまり見あたらない。それゆえ、児童雑誌にも寄稿したのではなかろうか。

こうしてみると、丹羽は、作家として子ども向けの作品を執筆することに、あまり魅力を感じなかったように思われる。

おわりに

戦後になって、丹羽は『海戦』を書いて戦争に協力した等の理由で、GHQによるページ問題で公職追放仮指定となったが、占領政策が終わると、『海戦』は復刊され、『現代日本小説体系』第59巻(河出書房 1952.4)、『昭和戦争文学全集』5(集英社 1964.12)、『戦争の文学』1(東都書房 1965.7)等に所収された。『海戦』は「戦後の大変動にたえ得る文学的実質をそなえていた」「今日に生きながらえるだけの文学作品」²³と、位置づけられたのである。

たしかに『海戦』は、日本海軍の華々しい功績を記したものに相違なく、丹羽が時代の要請から、戦争に協力したことは否定できない。だが、言論統制下でありながら、可能な限り自己に忠実に戦争の実相、戦争のもたらす悲劇を表したことは特質すべきことである。作者丹羽にとっては、「情痴」も戦争も一つの素材にすぎなかったようである。

一方、『少国民版 ソロモン海戦』は、子ども読者に配慮して、わかりやすい表現に、興味を持ちやすい内容に書き換えられたが、死のイメージが大幅に緩和され、日本海軍の活躍がやや強調され、完全勝利の物語となった。その点で戦争の実相を描いた作品とは言いがたく、原作が十分に反映されなかった面もある。しかし、子ども読者に軍人精神を植え付けるような作品にはならなかった。ここに、この作品の大きな存在意義がある。「少年倶楽部」に掲載された丹羽の従軍記は、大日本雄弁会講談社編集部の強い意向で、原形をとどめないほど変容している。

『海戦』を少国民版として出版する際、牧屋善三が実際にどの程度関わったのかは不明であるが、いずれにしろ、丹羽の意向を反映した作品であることには違いないだろう。戦時中に出版さ

れた子ども向けの戦記には、「少年倶楽部」掲載の従軍記のような「皇軍」兵士の活躍する物語が多い。『少国民版 ソロモン海戦』はそれらの作品とは明らかに一線を画している。また、海戦を描いている点でも希少価値が高い。『少国民版 ソロモン海戦』は、原作『海戦』と同様に、戦時体制下の注目すべき作品の一つに数えられるのではないか。

追記：資料調査にご協力いただいた国際児童文学館には、この場を借りてお礼を申し上げたい。

*なお、表記については、漢字は新漢字に改めた。文中の引用・頁数は、『海戦』（中央公論社 1942.12）、『少国民版 ソロモン海戦』（室戸書房 1943.4）に拠っている。

注

- 1 丹羽文雄『告白』六興出版部 1949.3 p.134
- 2 この頃の戦争関連の記事は、丹羽によると、新聞各社が特ダネを競う余地はなく、軍報道部が一括し選別して各社に渡す仕組みになっていたため、このニュースも一斉に報道され、新聞各社の記事には大きな違いが生じなかったようである。（『告白』p.137）
- 3 伊藤整「文芸時評 報道文の性格」「文藝」1942.10 p.42
- 4 丹羽文雄『告白』P.135
- 5 丹羽文雄「あとがき」『ソロモン海戦』国民画報社 1943.10 p.377
- 6 佐々木充「昭和17年 中島敦『光と風と夢』丹羽文雄『海戦』」「国文学 解釈と鑑賞」1983.8 p.67
- 7 「海ゆかば」とは、ラジオによる大本営発表が玉砕を伝える際に冒頭に流した曲のことである。「海行かば水漬く屍 山行かば草生す屍 大君の辺にこそ死なぬ かへりみはせじ」
- 8 火野葦平「解説」『火野葦平選集』第2巻 東京創元社 1958.11 pp.406-407
- 9 丹羽文雄『告白』p.150
- 10 牧屋善三「丹羽文雄・人と作品（一）」「文芸主潮」1943.1 p.157
- 11 十返肇「解説」『海戦』東方社 1959.2 pp.327-328
- 12 丹羽文雄『告白』p.328
- 13 丹羽文雄『告白』p.152
- 14 牧屋善三 前掲書 p.159
- 15 保阪正康『作家たちの戦争』毎日新聞社 2011.7 p.228
- 16 『水の化学』は、『水の話』という題名に変更され再版されている。
- 17 牧屋善三 前掲書 p.157
- 18 少国民版には「海ゆかば一艦内生活の断片」（「婦人公論」1942.10）の全体の3分の1程度が掲載された。
- 19 少国民版には「艦上日記一機関長のこと」（「文藝」1942.10）が一部省略されて掲載された。2つの短編は、どちらも『ソロモン海戦』（国民画報社 1943.10）に所収されている。
- 20 丹羽文雄 「ソロモン海戦従軍記『世界に比なき日本海軍の夜襲を見る』」「少年倶楽部」1942.10 p.55
- 21 同上書 p.62
- 22 1943年6月号の本文の最後85頁には、「前篇をはり」と記載されている。それ以降、この「夕陽ヶ乙女」は、少なくとも「少女の友」には連載されていない。作品が完結したのかどうかは不明である。
- 23 平野謙「解説 体験者と表現者の問題」『戦争の文学』1 東都書房 1965.7 p.437